

2022.10月号 No.13



## 特定非営利活動法人 都市環境協会

都市環境協会は、市民に対して都市環境の保全・改善に関する事業を行い、公益の増進に寄与することを目的としています。

清秋の候 皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

令和2年度より2年間、国の空き家対策事業を行って参りました。この事業において、寄付の相談があった物件の内、数件が不動産業者との契約が成立したとの連絡が入っています。昨年度、当協会が取得しました2物件のうち、中央区元下島の物件については、隣地集約後売却予定となっており、西区寺尾朝日通の空き地については中間所有という形で今後の活用を検討しております。中央区万代5の物件につきましては、特別措置法第40条の承認申請に向けて税務署と調整中であります。少しずつではありますが、空き家対策を進めている状況であります。今後も各物件につきまして状況をご報告していきたいと思っております。



〒951-8077

新潟市中央区烏帽子町3109

TEL/FAX : 025-225-1131

✉ yashinominouta@ybb.ne.jp  
事務局(美濃)



中央区元下島（外観）



中央区元下島（内観）



西区寺尾朝日通（現地調査の様子）



西区寺尾朝日通（リオンドール側）

裏面です

2022年は大河津分水 通水100周年、関屋分水 通水50周年の年であります。記念すべき年に鈴木理事長より、この2つの分水についてご寄稿いただきました。今後も理事の皆様から順番にご寄稿いただく予定であります。当協会の理事の皆様は各専門分野のエキスパートでいらっしゃいますので様々な視野からの『都市環境』について学ばせていただきたいと思っております。



## 大河津分水通水1000年 関屋分水50年 鈴木英介

県外の人を新潟市に案内すると、意外に思われることがある。信濃川の幅が狭いという事である。信濃川と言えば日本一の大河だ。その河口があ程度の広さなのかと言われる。

そこで大河津分水が1000年前、関屋分水が50年前にでき、ほとんどの水をそちらに落とし、今と説明する。もともとは、今の万代シテイのあたりも川の中だと言うと納得する。

信濃川は長さ367kmで日本一の長さである。流量は年間160億m<sup>3</sup>でこれも日本一である。古来より信濃川は暴れ川で、新潟県の平坦地は信濃川の洪水によって生み出されたものだ。そのため酸性土壌が多く、肥沃な大地とは言い難い。しかも低湿地となると、米以外の適当な作物は考えられない。

米は水を作る。人はその水を

引く田を作る。畑ほど土壌の良し悪しは関係がなく、水が変わるので連作もできる。

日本の国土はおおむね山岳地であり、平地ではその山から流れる川が扇状地を作り、沖積平野を作り、盆地を作り、湖沼を作っている。人々はその狭い平地に、肩を寄せ合い住んでいる。

この越後平野の平坦さは、単なる扇状地とばかり考えられない。長岡より上流は扇状地と言ってもよいと思うが、そこから新潟への平地はほとんど平だ。

これは水が海からも来た期間がかなりあったのではないかと想像する。今から126年前、明治29年に現在の燕市横田で堤防決壊による大洪水、「横田切れ」がおこり、越後平野はほとんど水没してしまった。

この「横田切れ」だが、記録

のはつきりしている江戸時代以降だけでも17回もあったと言う。もともと横田よりの下流域は信濃川の川筋が何本もあり、そこに刈谷田川、加茂川、五十嵐川と大きな河川が流れ込んでいる。一度洪水で水に浸ければ、

それが排水されるのはかなりの時間がかかったと思う。また一部は湖沼のままであったであろう。越後平野の海側は何層もの新潟砂丘によってふさがれている。今でも鳥屋野潟水面の海拔はマイナス2.5mで、親松排水機場と鳥屋野潟排水機場でポンプを使って信濃川に排水している。それがないころの亀田郷は地図にない湖と言われている。電動ポンプがなければ鳥屋野潟以南、亀田までの一帯は水の中だ。

風景は時代とともに変わり、人はその風土の中で生きている。

日本は谷間が連なり、山の向こうは別の国だ。島国とはいえ、日本の国家意識も明治以降でできたものに過ぎない。今でも「お国は？」と言えば新潟の事だ。明治維新で江戸に進駐した薩摩軍は江戸の人と言葉が通じなかったという。新潟県にもいくつもの藩があったが、国と言えば越後の国だ。

その新潟で人口減少が続いている。新潟市の中心地でも空き家が目立つようになった。都市にとつて人口の減少は致命的なことだ。ハードに頼る時代は終わり、いま新潟の活力を生む、ソフトパワーが求められているのではないか。「知のインフラ」を作っていかなければならない。